

実感できるまちづくりをめざして

ボランティアが支える世代間交流



おじいちゃんおばあちゃん保育ボランティア

大田市でも、都市部への人口流出などによる核家族化が進み、おじいちゃん・おばあちゃんと子どもたちが触れ合う機会が激減しています。そんな中、大田市内の保育園では頼もしい助っ人が大活躍しています！



大田保育園／森山節子さん

平成18年度、大田・長久・仁摩・温泉津保育園(所)でスタート。今年度から波根、久手、川合、鳥井の4園が加わり、市内8園で実施している。

ボランティアは週1～2回、1日3時間程度。

現在、ボランティア登録者は7人。

事業に関する問い合わせは、

大田市役所子育て支援課

(電話0854-82-1600代)

平成18年度から始まった、「おじいちゃんおばあちゃんボランティア事業」は、おじいちゃん、おばあちゃんと触れ合う機会が少ない子どもたちのために、人生経験豊かなおじいちゃん、おばあちゃんにボランティアで保育のお手伝いをしていただく事業です。絵本読みや、折り紙、手遊びなどのあそび、手洗い・トイレ・着替えの補助や、園の畑・草花の手入れ、ペンキ塗り、剪定、簡単な修理・補修などをお願いしています。

大田保育園に週2回のペースでボランティアに訪れる森山節子さんは、「子どもたちの顔を見たら自分も元気をもらって幸せな気分になる」と、いつも笑顔が絶えません。

小さい子のオムツ替えやおやつの介助など、保育士と一緒に子どもたちの保育の手伝いのほか、時には、子どもたちと一緒に昔ながらの遊びを楽しむ、子どもたちが安心して思う存分遊べるように、草取りにも余念がありません。

仁摩保育所でボランティアをしている松浦昭男さんは、園庭整備のプロフェッショナル。生木の丸太でテーブルと椅子を作ったり、日よけの遮光ネットを直したり、鉄棒の

周りに柵をしたりと、子どもたちが安全に楽しく遊べるよう配慮されている姿にはただただ脱帽します。職人さんならではの「おじいちゃんおばあちゃん」の周りにいつも子どもたちが集まっています。

今度は何が出来上がるのか、興味津々の子どもたちの目は、きらきらと輝いています。

たくさんのお孫たちに囲まれたおじいちゃん、おばあちゃんボランティアからは、「歳をとっているので、肉体的にしんどい面もあるが、子どもたちと関わることで元気をもらっている」、「保育士は若い頃の夢だったので、その夢が叶ったような気がして楽しい」などの感想が寄せられています。



仁摩保育所／松浦昭男さん



温泉津保育所／右田邦子さん

います。おじいちゃんおばあちゃんボランティアは、頼もしい助っ人として、今日も保育園(所)で活躍中です。



すべての住民が子育ての喜びを

地域で育む「聞く力」

おはなしビーンズ (五十猛町)

大田市では、子どもたちに絵本を読み聞かせるグループや、個人ボランティアの活動が盛んに行われています。日本人の国語力の低下が危惧される今日、日本語の美しさ・言葉の大切さを子どもたちに・・・



平成10年からスタート。
メンバーは30代から70代の女性13人。
世代は違えど子どもたちを思う気持ちは一緒！「ビーンズ」の由来は、さやえんどう。この名前には、「お話の種まきをしましょう」という思いが込められている。

代表 辻まゆみさん (五十猛町)
民生児童委員、主任児童委員として活躍中。現在、ビーンズの活動のほか、子どもからの電話相談を受けるNPO法人「チャイルドラインしまね」代表として忙しい日々を送る。



一方では、その頃、聖域と
言われていた小学校と地域との
交流は、ほとんどなかった
ため、読み語りの実現に向け
て学校側と何度も話し合いま
した。
それらの取り組みが実を結
び、平成10年の秋には低学年
のクラスでの読み語りが始ま
り、翌年には全学年で実施す
ることになりました。
当初は、下をむいて漫画を
読んでいた子もいましたが、

五十猛町の「おはなし
ビーンズ」は、大田市で初
めて、住民自ら、読み語りに
取り組んだグループです。
約10年前、不登校やいじめ
が社会問題として大きく取り
上げられる中、代表の辻さん
は「主任児童委員として何を
すべきか手探りだった」と、
当手を振り返ります。
まずは、小学校へ出かけ、
絵本の読み語りをすることを
思いつきます。しかし、何も
かもが初めてのこと。専門的
な知識が必要であると感じた
メンバーは、講演会や研修会
に足繁く通いました。
そのような熱心な取り組み
が話題となり、島根女子短大
で出前講座として、講義の中
でその取り組みの紹介をした
ことも。



月に1度の定例会はいつもこんな調子と笑顔で話すビーンズの皆さん

今では、読み手が紡ぎ出す物
語に、じっと耳を傾けていま
す。10年経った今、保育園の
頃から読み語りが、日常の
一部になっている子どもたち
は、自然に聞く力が身につい
てきました。辻さんは読み語
りの時間を通して、子どもた
ちの成長を見守ることが何よ
り嬉しいと顔をほころばせ
ます。
「これまで活動を続けてこ
られたのは、家族の理解と協
力と、そして何より自分たち
が楽しんで、無理をしない範
囲で続けてきたから」と語る
ビーンズの活動はとどまる
ところを知りません。
現在では、保育園や小学校
の読み語りだけでなく、高齢
者のミニサロンや、福祉施設
での人形劇や紙芝居、語り部
スタイルでの地域の民話の読
み語りなどの活動も行ってい



お話を聞く子どもたちの視線はまっすぐに読み手へと注がれる



勉強に入る前に、リラックス。気持ちよく一日を過ごしてほしいとの思いから、心に伝わる絵本を選んでいる

ます。
五十猛町には、「子育て
援団」として、ビーンズの
ほか、あそびサークル、あ
じっこクラブ、ポケットクラ
ブの4つのグループがありま
す。遊びサークルの作った人
形でビーンズが人形劇をす
るなど、それぞれが連携し、
地域ぐるみで子育てに取り組
んでいます。